

お便り発刊に際して

この度、神宮寺便りを発刊する運びとなりました。この紙面を通じて、檀信徒並びに一般の皆様とお寺との距離が少しでも近付ける様に精進致しますので、末永く御贖願の程、宜しくお願い申し上げます。

「神宮寺と普天満宮」

担当 良啓

合掌

当寺と隣接する普天満宮とは、創建時、琉球八社の一つとして、合同で建立されました。今から五百五十四年前の事です。その頃は、「神仏習合」と呼ばれ、神社と寺院を同じ宗教と考える習慣があり、同一の敷地内に建立されていました。

口伝に依れば、第一尚氏王統尚泰久琉球国王が首里より普天間方面を視察に来られた際に、洞窟を中心とする聖地としての賑わいに感銘を受け、寺院並びに神社の建立を勅願されたそうです。また、別の口伝に依れば、中城城主護佐丸が勝連城主阿麻和利に滅ぼされた時に、焼け落ちた中城城の廢材を当地に運び、護佐丸公の菩提を弔う為に建立されたとも伝えられています。

第二次世界大戦により古い文献が残っていない為に詳細は分かりませんが、尚泰久王も護佐丸も同時代の人物なので、どちらも真実なのではないでしょうか。その後、明治初期の神仏分離令により別れましたが、八社の内、現在も神社と寺院が残っている場所は、普天間と波の上だけです。



神宮寺



普天満宮

弘法大師のことば 担当 裕俊

鈍き刀の骨を切る 必ず砥の助に由る。
おも くるま かる はし そもそ またあぶら ゆえ
重き輜の軽く走る 抑も亦油の縁なり。

三教指帰卷上・龜毛先生論より

「なまつた刀で骨を切るには、必ず砥石の助けによらなければならぬ。また、重き大車を軽く走らせるには、油の力を借りなければならぬ。」心の無い物質(刀、車)であっても、切れ味が悪くなったり、歯車が回らなかつたりと、その物単体だけではいずれ使えなくなります。他の道具(砥石、油)に助けをもらうのです。心ある私たち人間も、1人では生きていきません。父母の支え、友人の支え、妻子の支え、お互いに支え合って生きていくと自覚し、他人を思いやる気持ちをお忘れないようにしましょう。

今月のお茶

「薄荷茶」

担当 金城奈緒子

薄荷(ミント)の歴史は古く、平安時代に「波加」と言われ山菜として食されていました。やがて薬物としての利用が盛んになりました。本格的に栽培されるようになった和種薄荷は東南アジア原産とされ、中国から仏教とともに伝来したと考えられています。

今月の学ぶ会で提供します。

発行 普天満山神宮寺
住所 宜野湾市普天間1-27-1
電話 098-1892-3335

